

# 後宮の隠れ薬師は闇夜を照らす

絹乃 Kinuno



アルファポリス文庫

目次

一章	司燈 <small>しとう</small> と書令史 <small>しよれいし</small>	5
二章	偽 <small>いつはり</small> の女流詩人	107
三章	隠れ薬師 <small>くすりし</small>	262

一章 司燈と書令史

1、姉の仇は後宮にいる

新杷国の都から離れた山のふもと。そこには薬師の村がある。

わずか七歳の陸翠鈴は誓った。

姉を殺した男を、決して許さない。

あの日の光景は、十五年経った今でも忘れない。翠鈴の目の高さにあつたのは、姉の足だ。

夕暮れ時の薬草小屋で、姉である明玉の素足がゆらりと揺れていた。

「ねえさん？」

開いた扉の形に四角く切りとられた夕暮れの光で、翠鈴の黒い影が長く床に延びる。床には鮮やかな赤い花びらが散っていた。何枚も、何枚も。

翠鈴は、自分が何を見ているのか分からなかった。理解できないのに、本能が「だめだ」と告げる。

（だれかを呼んだほうがいいの？）

そう思い、翠鈴が踵を返した時、小屋に薬草を取りにきた母の絶叫が響いた。

耳をつんざくくらの声で、ねぐらの木に帰っていた鳥が暮れていく空に一齐に飛びたっていく。

嗅ぎなれた薬草と、鬱金に似た花の匂い。それに重なるのは、血と髄すえたにおい。

「ねえ、ねえさん。遊んでるの？」

翠鈴は、こわばった笑みを浮かべて尋ねた。

梁からぶらさがって遊んでいることにしないと、おかしくなるから。何もかもが崩れるから。認めなくちゃいけないから。

「ねえさん。返事してよ」

お願いだから、「びっくりした？ ちょっととぶざけちゃったわ」って、いつもみたいに笑ってほしい。

姉の足はあまりにも白かった。辺りに散る赤い花卉に雫を垂らし続けながらも。

「翠鈴。明玉は自殺したんだ」

絞り出すような声でそう言い、父は床に下ろされた明玉を見つめた。母は肩を震わせて、ただ泣いている。

強く叩かれたのだろうか、殴られたのだろうか。姉の頬と瞼まぶたは、青く腫れあがっていた。これで二度目だ。

嘘だ。こんなの嘘に決まってる。なのに、翠鈴は涙を流すことができなかった。ただ圧倒的な暴力を受けたかのように、胸倉を掴まれて力任せにみぞおちに拳を振るわれたかのように苦しくて、息ができない。

でも、呼吸をすれば、嫌なにおいを吸ってしまふ。

また、床にぼたりと雫が落ちる。

（こんなの、ねえさんのおいじゃない）

「明玉には、結婚を約束した男がいたんだ。王都の官吏試験に通ったらしい。明玉はとても喜んで、柀京はきょうで共に暮らすと話していたのに」

「あの子は捨てられたのよ。どだい無理だったのよ。こんな田舎の娘が、官吏の妻になるだなんて」

両親の言葉は、まるで雨だれのように明玉の体に落ちていく。村の者は、小屋の外

で遠巻きに手を合わせるばかり。

(だめだ。こんなのちがう。ねえさんは、幸せになるはずだったんだ)

「起きてよ。みんなが見てるよ」

翠鈴がどんなに体を揺すっても、姉は臉を開いてはくれない。

床に散乱した鬱金香の赤い花びらが、やけに稠々しく思える。先の尖ったその花卉は、まるで血が散ったかのようだ。

見れば、明玉の指は赤くかぶれ、湿疹ができていた。さらに、どこかを掻きむしったのだらう、右手の爪が血で染まっている。

こんなにも惨めに身も心もぼろぼろになって、そして死んだ。

「父さん。その男が、ねえさんをころしたの？」

翠鈴の声は、七歳の女兒とは思えぬほどに低い。

——翠鈴は物覚えがいいのねえ。あたしと違って賢いから、きっと父さんみたいに立派な薬師になれるわ。

山で薬草を摘みながら、明玉は翠鈴を褒めてくれた。だから一生懸命、薬草を覚えた。難しい文字だつて読めるように、書けるように頑張った。

——わたし、ねえさんといっしょにお薬をつくるの。

——そうね。苦しんでいる人を助けましょうね。

薬研で薬を挽きながら、明玉はおつとりとした口調でそう言った。約束された未来は、当たり前前に来るものと信じて疑わなかった。

それなのに一年前、明玉が道に倒れていた男を救ったことで姉の運命が変わったのだ。

「ねえ、その男が、ねえさんをころしたんでしょ？」

「……明玉は騙されていたんだ」

「だまされたつて……結婚するつて、嘘だったの？　じゃあなんで、そんな約束をするの！」

頭の奥がかつとなって、翠鈴は叫んだ。

「翠鈴。これ以上は言わないでやってくれ。明玉を惨めなままに旅立たせたくはない」

こんなにも震えて、かすれた父の声を聞くのは初めてだった。

子供である翠鈴は、結婚のしきたりがどんなものかは知らない。だが、以前姉は話していた。

——豪友さまは、官吏試験に受かるのに何年もかかったの。とっても真面目で頑

張り屋さんよ。お勉強が忙しくて、仲人を立てる時間もなくてね。でも、あの人の真心に偽りはないわ。

だから親族も村の者も、明玉の幸せな将来を祝ったのだ。  
 なのに……すべてが嘘だった。

——「死ね、この尻軽女が！」って、「お前は俺の邪魔をするのか」って！ なんだあたしが殴られないといけないの！ 豪友さまが望んだから、あたしは……彼を受け入れたのに。

姉は涙を散らしながら、床を叩き続けた。頬は腫れて、瞼もうまく開かない。それでも慟哭は止まなかった。

——今さら「あたしは騙されていました。お祝いの品はお返しします」なんて、そんな恥さらしなことをできるはずがないわ！ 女一人で生きていけないのに……この先、どうすればいいの。教えてっ。ねえ、誰か教えてよ！

床に崩れ落ちるように叫んでいた姉の姿を、翠鈴は忘れることができない。

——いやよ！ 一人なんて無理よ。絶対に豪友さまを逃がさないわ。責任をとってもらうわ。

あれが翠鈴が見た生きている姉の最後の姿だった。

姉の悲鳴にも似た叫びを思い出すと、今も耳の奥がひどく痛む。姉の強い思いが、さらに彼女自身を追いつめてしまったのか。

翠鈴は、血に似た色の花びらの中に落ちている球根を拾う。茶色い皮がめくれて、中が深くえぐれていた。球根には白い液汁が滲んでいる。

(どうして、鬱金香を？ これは毒があるのに)

姉はいったい何をしようとしたのだろう。翠鈴は手がかぶれるのも構わずに、球根を握りしめた。

村の周囲に自生する鬱金香の花が満開の春。赤や黄、白の可憐で小さな花に囲まれて、明玉は埋められた。

牡丹百合とも呼ばれる、姉の好きだった花。

一年、二年、三年を経ても、ずっと花は咲き続けた。

そして十四年後の春。

「行ってくるよ。姉さん」

墓前に告げて、翠鈴は村を出た。

姉を騙した豪友のことを考えると、今も憎しみで足の先まで痺れそうになる。どん

な些細なことでも見逃さぬよう、豪友の手がかりを掴むことができるように、翠鈴は並外れた集中力で人や物事の裏に隠れた事情を推察するようになった。

すべては復讐のためだ。

(だから、わたしは後宮に行くのよ。絶対に姉さんの仇を討つてやる)

東から吹く風に、鬱金香の花が手を振るように一斉に揺れた。

頭上からは、薄紅の海棠の花が散っている。はらはらと、名残の雪のように。



後宮には、宮女が暮らすための宿舎がある。

二十二歳になった翠鈴は、宿舎の硬い寝台で目を覚ました。

艶のある黒い髪と、抜けるほどの白い肌。だが、とにかく目つきが悪い。もし天井に心があるならば、毎朝寝起きの翠鈴に睨まれてとつくに病んでいるに違いない。それほどまでに、長いまつ毛に縁どられた翠鈴の暗褐色の瞳は鋭かった。人より黒目小さいのも理由だろう。

後宮で他の宮女と目が合えば、相手は凍りついて立ち尽くし、猫と目が合えば

「シャーツ」と威嚇される始末だ。

(しよがないじゃない。あいつとどこで出会うか分からないんだもの)

新把国の都である把京。皇帝の住まいである宮城のさらに奥にある後宮で、翠鈴は暮らしていた。

去年のこと。近くの町に、宮女となる娘を集めに来るとの噂を聞いた翠鈴は、ようやく機会が巡ったと村から町へ走った。

ただ、宮女として働いている間は結婚はできないし、女の園だから虐めも多いと聞く。好んで宮女になりたがる娘は多くはない。

宮女の上の女官であれば待遇も良いが、試験がある。だが、後宮に入る機会をもうずっと待ち続けたのだ。勉強をして試験日を待つ余裕などない。

姉を捨てた元婚約者が、そこにいるのだから。

そうして翠鈴が宮女となり、一年以上が過ぎた。なんの進展もないままに。

「翠鈴ったら、顔、こわーい」

隣の寝台で目を覚ました由由が、膝を抱えて翠鈴に視線を向けた。幼さの残る彼女は、まだ十四歳。宮女になるには妥当な年齢だ。むしろ翠鈴のような年を取った新人などいない。

「急に寒くなったよね」

「けげほと小さく由由が咳きこんだ。

「仕事で夜風に当たるから、余計にね。喉を痛めると、風邪をひくわよ」

翠鈴と由由は、後宮で司燈として勤めている。夕暮れに殿舎の灯をともし、日が昇る前に消灯するという仕事だ。司燈でも燃料の油や宮灯を管理、保全するのは女官だが、実際に現場で働くのは宮女となる。

新把国は灯の燃料となる菓種が広く栽培されている。ゆえに油は安価で流通し、防犯のために、妃嬪の宮の門や回廊は夜明けまで灯籠の火を消さぬのが慣例となつている。

翠鈴と由由は、蘭淑妃の住まいである未央宮の灯を担当していた。

簡素な寝台から下りた翠鈴は、小さな菓箱の引き出しを開いた。

本当は引き出しが五十個ほどある、大きな百味筆筒が欲しいところだが、宮女一人が使える空間など限られている。

翠鈴は菓箱から、布の小袋を取りだした。ほんのりと甘く爽やかな香りがする。

「これを煎じて飲めばいいわ」

「なあに？」

由由がてのひらに載せられた袋の口の紐を開くと、かさかさに乾いた茶色のかけらが入っていた。

「陳皮よ。蜜柑の皮を干したものだ」

「腐つてない？ 陳皮はうちでも飲んでいたけど、こんな色じゃなかったわ。母さんが作るの、もつと色がきれいだったもの」

由由は顔をしかめて言う。

確かにこれは鮮やかな橙色ではなく、縮んだこげ茶のゴミに見える。

「陳皮は古いほどいいのよ。十年や十五年経ったものが、よく効くわね。咳に効くんだけど、いらない？」

「の、飲むわ」

また咳きこみながら、由由は返事した。熱でも出して寝込もうものなら、そのぶん給金が減らされてしまうからだろう。

「ありがとうね、翠鈴」

「いいのよ。もう秋だし、蜜柑の皮は侍女に頼めば手に入るから、時間があれば陳皮を作っておくわ」

この未央宮には、蜜柑の木が生えている。侍女に頼んでおけば、蘭淑妃たちが食

べる時に剥いた皮を取っておいてもらえるのだ。

翠鈴は夜着を脱いで、左の袴の上に合わせた薄水色の衣を着た。仕事の邪魔にならぬよう、長袖は袂のない細い形をしている。

次に足首までの長さのある、淡い群青の裙を巻きつける。宮女の裙は布がざらりとして粗い。胴の部分で紐を結び、さらに厚めの白茶の上着を羽織る。

櫛で長くまつすぐな黒髪を梳き、一つに結ぶ。「鋭利」という言葉を体现する女性がいるとしたら、おそらくそれは陸翠鈴だ。

翠鈴の着替えの様子を、寝台に座ったまま眺めていた由由は呟いた。

「やっぱり大人っぽいわね、翠鈴は。何を食べたら、そんなに背が伸びるの？」

「え？ あ、そうね……たぶん、背の高い家系なのよ」

いけない。翠鈴は慌てて猫背になった。背筋を伸ばせば、身長の高さが際立ってしまふ。

後宮に入る時、二十一歳の宮女の新人など採用されないからと、翠鈴は年齢を詐称した。

翠鈴は今年二十二歳だが、今は自称十五歳だ。

（さすがに七歳もごまかすのはまずいかと思っただけど、案外平気みたい）

胸が小さいのと、肉付きの悪さが幸いしたようだ。

とはいえ、宮女を指導する女官の方が翠鈴よりも若いし、背も低い。姿勢の悪さをよく女官には叱られるが、年齢がばれるのは困る。それに、普通に立てば女官は背伸びをしながら翠鈴を怒らないといけないのでしょうがない。

「背の高さだけじゃないわ。翠鈴は大人顔負けの薬の知識があるもの。すごいわ」

「あら。由由は愛らしいし、縫い物が得意でしょ。わたしは不器用だから、羨ましいわ」

「えへへ、そうかなあ」

同じ頃に宮女となった由由のことを、翠鈴は可愛く思っている。姉の明玉も、自分のことをこんな風に見ていたのかと思うと、少し切ない。

司燈の仕事は、夕暮れ時と夜明けに灯を管理する以外にも、昼は宮灯を磨いたり、照明の油を補給したりする。使うのは菜種油や桐油という、油桐の種を搾ったものだ。さらに手が空いている時は、食後の皿を下げる手伝いもすることがある。司燈の務めではないのだが、厨房や侍女たちの慌ただしい様子を見て見ぬふりをするとはできない。

ちなみに、翠鈴は侍女や女官ではないので、主の蘭淑妃と直接話をすることはない。

皇帝の妃のうち四夫人しふじんの一人である蘭淑妃は、正一品しょういっぴんという高位である。まさに神々しんじやうしい蘭の花のような美しさだ。淑妃には公主である娘が一人いる。

「ツイリン。タオリイもはこびたい」

昼食の後の皿を運ぶ翠鈴に、公主の桃莉ウケリが飛びついてきた。

桃莉公主はまだ五歳だ。ぴよんぴよんと跳ねるたびに、二つに結んだ栗色の髪が上下に揺れる。

通常は、皇帝の娘がある程度成長してから公主に封じられる。だが、陛下みかどの初子はつごということもあり、桃莉は皇女ではなく、特別に公主の位を賜たまっていた。

「公主さま。お皿が割れてしまいます」

なんとか腕にしがみつこうとしてくる桃莉を、翠鈴は軽やかにかわす。両手に皿と器うつわを積み上げているのに、ずれることも音を立てることもない。

「ぜんぶたべたから、ごほうびにはこんでもいいの」

「そのようなご褒美は聞いたことがあります」

「ナイピンね、とろーってなっておいしかったよ。でもね、おとりおきしてたらね、ナイピンかたくなっちゃった」

桃莉の声が、最後の方は残念そうにか細くなる。

（ナイピン？ ああ、奶餅ナイピンか。牛乳を加工した食べ物だよね、確か。珍しいものを召しあがるんだなあ）

さすが公主、宮女とは食べているものが素材から違う。

「タオリイもしたい」

「いけません。これは宮女の仕事です」

翠鈴にたしなめられて、桃莉はぶうつと頬をふくらませた。

「でも、お手伝いをしてくださる気持ちはとても嬉しいですよ」

そう言っ、翠鈴は右手に持った器うつわを左手の皿の上に移す。そして、まるで塔のような高さの食器をもつともせず、懐なつかから小さな包みを取り出した。

「うわあ。いいにおい。タオリイ、このにおい、しつてるよ」

「銀木屋ですよ。桂花けいかともいいいますね。この未央宮おうめいゆうでも植えられていますから、ご存じなんでしょう」

「ごんじです。なまえはしらなかつたけど」

桃莉は、肺がいつぱいになるほどの勢いで銀木屋の香りを吸いこむ。

「一介の宮女から公主さまに物を差しあげることではできませんが、香りはこの場で楽しめますので、存分にどうぞ」

翠鈴に勧められて、桃莉はてのひらに載せた袋を鼻に近づけた。

「このしろいおはな、おにわにおちてるよ。タオリイもあつめたいなあ」

「そうですね。庭には毒のある草もありますから、何でも拾わない方が安全ですよ。知識のある者に一緒についてきてもらうといいですね」

「でも、だれかにおねがいの、こわいもん。それに、おにわはへびもいるし」  
 もじもじと桃莉は体を左右に振った。

公主である桃莉のお願いを誰も無下にはしないだろうが、本来の仕事とは違う用事に時間を割きたい者もいないだろう。

しかし蛇が入りこんでいるのは問題だ。

（蝮まむしだったら、捕まえて酒に浸けるんだけど。蝮酒は滋養強壯にもなるし、胃の病や貧血にも効くから）

とはいえ、まさか宮女が毒蛇を踏んづけて、甕かめに入れて白酒バイセイウを注ぐわけにもいかない。村では当たり前になっていたけれど、後宮では大騒ぎになってしまふ。

『いやだ。あの司燈しとう。蛇と闘っているわ！』

『きゃあああ！ 甕かめに放りこんだわ。しかも噛みつこうとする蛇に酒を浴びせるなんて……恐ろしい！』

なんて噂が広まりでもしたら大変だ。復讐のためにも目立つことは避けなければ。

（蝮酒は高く売れるんだけど……でも、自重しないとね）

翠鈴は小さく息をついた。

「わたしも未央宮びわくきやうの庭に出ますから、その時にご一緒しましょうか。蛇の嫌う匂いを知っていますので、それを木の根の辺りに置くようにします。樟脳しょうのうと言って、においがきついのですが」

「いいの？」と、桃莉の声が軽やかに弾む。

「はい。ただし、樟脳しょうのうは手で触れると危険ですよ」

「きけん？」

「ええと、危ないってことです。間違つて口に入れたら死んでしまいますし、樟脳しょうのうを触った手で目をこすつたら大変なことになります」

「わ、分かった。タオリイ、さわらない」

樟脳しょうのうは本来虫よけとして使われる。ほかにも水に混じらない性質を生かして、樟脳しょうのうのかけらを舟に見立てた木片のお尻につければ水面を進むような遊びもできる。扱しよいさえ間違わなければ有益だが、小さな子供が経口摂取すれば死に至ることもあるのだ。

遅れてやってきた由由が、皿の塔を持ったまま公主である桃莉と話す翠鈴を見て、目を丸くした。

「すごいわ。翠鈴」

「慣れたら、誰でも持てるわよ」

「いや、お皿じゃなくって」

由由が来たことで、桃莉は走って逃げてしまった。髪に結んだ緞帯リボンをなびかせながら、柱の陰に隠れる。

「桃莉さまは、人見知りが激しくていらっしやるのに、仲良くなれるなんて。そうでなくとも翠鈴は目つきが怖いし」

「……ちよつと失礼じゃない？」

「それに柔らかな女性らしさもないし」

由由の遠慮のない言葉に、さすがに翠鈴は顔をひきつらせた。まあ、否定はしないけれど。

「由由は、もっと言葉を選んだ方がいいかな。もしかして、お母さんが率直というか、齒はに衣着せぬ物言いをする人？」

「なんで分かるの！ 当たってる。すごい」

翠鈴の指摘に由由は目を丸くする。

（ん？ それくらい普通に分かるんじゃないの？）

親子仲が悪くなければ、母と娘のしゃべり方が似ることもあるだろう。これまで由由から母親の悪口を聞いたことがなかったので、そう推測しただけだ。

そのことを踏まえると、翠鈴は桃莉が自分に懐く理由が分かった気がした。

由由に悪気があるわけではないが、子供は大人が考えているよりも聡まことい。由由に「人見知りが激しい」と思われていると、桃莉も雰囲気まなづかで察するのだろう。

母親である蘭淑妃が社交的なので、余計に桃莉の内気な部分が目立ってしまうことを、もしかしたら本人も気にしているのかもしれない。

まだ皇帝には、太子となるべき立場の男児がいない。

皇后にも、四夫人よふじんである貴妃、徳妃にも子はない。賢妃けんひには最近子が生まれたが、女の子だ。

（いずれは男の子がお生まれになるだろうけど、今の時点では蘭淑妃のお子さまでいらっしやる桃莉さまが注目されるのも仕方がない）

公主という特別な立場であればあるほど、桃莉に普通に接する人は皆無だ。

だが、翠鈴は桃莉を子供扱いはしない。内気な点を気にすることもなければ、やた

らと敬うこともしない。それが桃莉にとつては気楽なのかもしれない。しばらくして、柱から姿を現した桃莉が回廊に向かう。長い袖と淡い色の髪をなびかせて、ぱたぱたと軽い足音が去っていく。

その小さな背中にはいしかかるのは、一国の公主としての重圧だろうか。

自分と比べるわけにはいかないが、翠鈴もまた、小さい頃は薬師にならねばと負っていた。

なぜなら、薬師の親族が住まう村の子供の中で、自分が一番知識があったから。使わずぎれば毒になる薬草の加減も、すぐに覚えたから。

（わたしが父さんの跡を継ぐのに相応しいと分かっていたから、姉さんはあのクズ男と村を出る決意をしたのよ）

自分の物覚えが悪ければよかつたのだろうか。

姉は婚約者をいずれ紹介すると言っていたけれど、その前に悲劇が起きたので、翠鈴は男の顔を知らない。

だからここに来てからずっと、翠鈴は後宮内ですれ違う宦官の顔をつぶさに観察していた。そのたびに宦官たちは脅えた顔で立ち尽くすか、あるいは翠鈴を罵倒した。相手からすれば、身分の低い宮女に睨まれたと感じるのだろうか。

（でも、きつと見つけてみせるわ、姉さん）

翠鈴がまだ村で暮らしていた頃、後宮の医局に勤める幼なじみの胡玲が、帰郷した折に教えてくれたことがある。

明玉を捨てたと思しき男が、外廷で文官であった時に横領の罪で宮刑に処せられたとの噂を聞いた、と。その男には、翠鈴が推測した元婚約者と同じ特徴があった。

亡くなった姉の爪の間には、血や皮膚が詰まっていた。当然、首を吊ればあまりの苦しさには自分の喉元を掻きむしるだろう。だが、当時の翠鈴には、姉の首に残った爪の痕と、爪にこびりついた血の量が一致しないように思えた。右の指は、やけに血まみれだったのだ。

翠鈴はまだ幼かつたから、それを両親に説明することはできなかったが、何年も違和感が残っていた。

（それに床には、えぐられた鬱金香の球根が落ちていた）

大人になった現在、導き出した答えは、姉は死の間際に元婚約者に毒を使った可能性があるということだ。皮膚から染みる、鬱金香の毒を。

別れを切り出し襲ってきた相手に、姉はとっさに反撃したのだろう。自分を捨てて、あなただけが幸せになるなど許さない、と言わんばかりに男の体を引っ掻いて、毒を

塗ったに違いない。

ならば、元婚約者の顔には派手な引つ掻き傷が残っているはずだ。

そして以前、胡玲が医局で対応した相手に、顔に傷のある宦官がいたと言っていた。その宦官は、かつて外廷の官吏であったと自慢していたという。

豪友という名は知っているが、後宮で働く宦官の数はあまりにも多い。だから翠鈴は早々に、その男の名を出してどこにいるのかと人に尋ねることは難しいと判断した。翠鈴が宦官を探していると噂が立つのは避けねばならない。捨てた女の妹が復讐に来たと相手に勘づかれては、元も子もないからだ。

胡玲と同じ医局に勤めるという手もあったが、官女の方が行動範囲が広く、仕事を理由に目立たずに動ける。さらに姉と同じ陸の姓を持つ娘が薬師であると、豪友に知られるわけにはいかない。

この後宮にいるはずなのに、姉を捨てた男はまだ見つからない。

「これは桃莉さま。お走りになっては、危ないですよ」

遠くから聞こえる、男性のものなのにどこか澄んでいる声。

翠鈴が声のする方を見れば、そこには二十代半ばの宦官が立っていた。桃莉の前で、

胸の前で手を組み合わせて掛礼している。

確か彼の名前は松光柳ソンクワンリョウ。絹糸のような艶のある明るい色の髪を一つに結んでいる、美しい宦官だ。

官位の高い者がつける小さな冠と、それを留める簪ではなく、髪を結んだ部分に飾り紐をつけている。

もう一人、光柳の背後で掛礼しているのは同僚だろうか。細身の光柳と違い、薄い褐色の肌みくまに逞しい体躯たいくをしている。

「あ、いいなあ。桃莉さま。光柳さまにお相手してもらってるわ」

「由由。いいものにも、公主が宦官に声をかけられて何が羨ましいの？」

皿を運びながら、翠鈴は呆れた声を出した。

松光柳は、秘書省の書令史だ。皇帝の言葉や辞令を書きとめる仕事をしている。書令史しよれいしは流外三等りゅうがいさんとうであり、身分は決して高くない。だがざりりとした髪と琥珀こはくの瞳を持つ光柳は、なぜか上品に見えた。女官や宮女の間でも、彼の人気は高い。

「ねえ、由由。どうして皆は彼を『さま』付けで呼ぶの？」

「だって、光柳さまだもの」

答えになつていないと翠鈴は思ったが、由由の目はとろんと蕩けていて、これ以上

聞いてもおそらく無駄だろう。

翠鈴は、光柳をじっと見据えた。

(確かに他の流外の宦官とは違って、気品はあるかな)  
皇帝陛下の言葉を書きとめるといふ立場だから、見目好く麗しい宦官を選んでゐるのかもしれない。

光柳の姿は、夜に咲いている白百合を連想させる。清々しい美しさなのに、太陽と青空の下よりも月の光を浴びてより香りたつ、気高く白い花だ。

「あの、ね。おにわのへび、もういない?」

桃莉は、小さな声で光柳に問いかけた。由由に対するほどの内気さではないが、特段親しいというわけではないようだ。

「蛇ですか? そのような話は聞いておりませんが」

「でも、いたの。あついときに。おつきなへびがたちあがって、しゃーつてくちをひらいてた、から」

うつむいてしまった桃莉の声は聞き取りにくい。

光柳は回廊の床にしゃがんで、桃莉の口にそつと耳を近づけた。他の宦官なら「失礼ですが、なんと仰いましたか」と何度も聞き返すだろうに、光柳は子供相手でも

丁寧<sup>ていねい</sup>に接している。

「公主さまは庭で遊びたいのですか?」

こくりと桃莉がうなづく。

「ぎんもくせい<sup>ぎんもくせい</sup>が、いいにおいだから、おはなをあつめたいの」

「桂花<sup>けいか</sup>のことですね。あれは香りのよい、素晴らしい花です」

誰から銀木犀の話聞いたのか、とは光柳は尋ねない。それを聞けば、問い詰めてゐるように桃莉が感じると考えたからだろう。

(ふうん。女性に人気があるだけかと思つていたけど、子供の扱いはうまいんだ)

翠鈴の視線に気づいたのか、桃莉に一礼をした光柳が近づいてくる。

「人を射殺しそうな目だ」

「は?」

翠鈴は呆然とした。

初対面の相手に対して何て言い草だろう。

「弓を引き絞り、力をためて矢を放つ——そんな鋭い光をしている。澀<sup>よど</sup>んでいない、  
牙え切つた憎悪だ」

「光柳さま。率直に物を言います」

光柳の隣に立つ宦官が彼をたしなめたが、それも助け舟になっていない。

翠鈴はきつと睨んで言い返す。

「書令史しよれいしっていうのは、無神経な人が務めるものなんですか？」

「ほら、怒らせてしまったじゃないか。謝れ、雲風ウンフウ」

光柳は、雲風と呼んだ宦官の頭を押さえつける。

冴えた雰囲気的光柳と違い、雲風はかなりの高身長だが、物静かでにこやかだ。光柳より少しだけ年上に見えるので、二十代後半だろうか。瞳の色は淡く、澄んでいる。そういうえば、以前、侍女たちが光柳の側に杜トウという姓の逞たくましい宦官がいると話していたが、それが雲風だったのか。

（いや、怒らせたのはあなたの方だけど）

翠鈴は小さく息をついた。

「その……言っていることと悪いことがあるな。すまない」

「いえ、事実ですから気にしていません。では、失礼いたします」

翠鈴は、胸の前で右手で左手を包みこみ礼をする拱手あしうでをしようかと思ったが、皿を持っているので手を合わせる事ができない。

まあ、無礼な相手にそこまでしなくていいかと思ひ直し、そのまま翠鈴は厨房へ立

ち去った。

## 2、蝮草ハチクサ

秋が深まると、夏よりも日の出がどんどん遅くなる。

そのぶん、灯籠とうろうの消灯の時刻が遅れるのは、ゆっくり動きたい翠鈴にとってはありがたい。

庭の奥では銀木犀の花が盛りだ。金木犀ほどの鮮やかさではないが、朝陽を受けて美しく輝いている。

「どうしたの、翠鈴。外に何かいる？」

門の灯を消した由由が、小走りに戻ってきた。

「ああ、銀木犀を見ていたのよ。桃莉さまと花を集める約束をしているから。それにしても、今朝は侍女たちが早起きね」

まだ朝も早いのに、回廊では侍女たちが立ち話をしている。浮足立った、そわそわした雰囲気びびりあつちゆうが未央宮びわんきゆうには満ちていた。

「そうなの。昨夜は陛下のお渡りがあったそうよ」  
なぜか誇らしげに由由は胸を張って言う。

「陛下がお戻りになってから、淑妃さまが書き写してくださいましたの。陛下から麟美さまの詩を賜ったそうよ」

聞こえてきた声は、侍女頭の梅娜のものだ。同僚の侍女たちに紙を広げて見せている。

「淑妃さまは、本当にお優しくいらっしやるわ」

「そうね。それに一度お会いしてみたいわ、麟美さまに」

（麟美？ 聞いたことがない名だな。誰だろう）

翠鈴が思案していると、侍女の一人が、紙に書かれた文章を詠みあげる。

「颯々と秋雨が降る、我はあなたに手を伸ばす。指に触れるは銀のしずく。あなたはどこに。夢と知っていたならば、ずっと眠っていたものを」

（詩……？ 情緒的だし、女性が詠んだものかな）

一行目、二行目、三行目の文末が「くウ」の響きを持ち、韻を踏んでいるようだ。

昇りはじめた太陽が、未央宮の菊の花に宿る朝露をさらさらと輝かせる中、翠鈴は軒の灯を消す棒を引いた。

（まあ、後宮勤めの間は簡単に外には出られないし、恋愛も難しいから、切ない恋の詩は人気がありそう）

そんなことを考えながら翠鈴は次の灯籠を消そうと進むが、由由は立ちどまったままだ。

「麟美さまの詩って、やっぱり素敵ねえ」

うっとりとした目で、由由は侍女たちを眺めている。

「麟美って誰？」

「翠鈴、知らないの？ 後宮にいらっしやる女流詩人よ。恋の歌が得意なの」

由由は字は読めないが、恋の詩には興味があるようだ。

翠鈴は植物の名を書き写すことで文字を覚えたが、それは薬草の効能を覚えるためのものであって、詩には疎い。

（姉さんが詩が好きだったから、教えてもらったことはあるけれど）

「翠鈴、颯々ってどういう意味？」

「風が吹いて音を立てる様子を表しているのよ。字はこう」

翠鈴は空中でひとさし指を動かした。「えー、分かんないよ」と、由由は唇を尖らせる。

けれど、憧れの詩人の新作を偶然でも耳にした由由の顔は輝いたままだ。光きらめく朝露のように。

(桃莉さまとの約束の日まで、強い風が吹かずに銀木犀の花が残っていますように)  
小さな公主の笑顔がまた見られることを願って、翠鈴は庭の奥に再び目を向けた。



数日後。翠鈴と桃莉公主は、未央宮の庭に出ていた。

銀木犀の花を集めると約束した日だからだ。

秋の庭には、瓔珞草とも呼ばれる秋海棠が、淡い桃色の花を咲かせている。

(秋海棠しゅうかいとうかあ。口に入れると毒だけど、すり潰したら皮膚病に効くんだよね。それと、人には言いづらい、恥ずかしい部分の強烈なかゆみにも。密かに悩んでいる女性は多いだろうから、うまく売ればいい商売になるんだけどなあ)

後宮は人が多いから、山里の村にいるよりも儲かるはずだ。

(あんなにたくさん生えているのに、眺めるだけなんてもったいない。ああ、売りたいなあ。でも、司燈しとうのわたしじゃ花は管轄外だし。庭を管理する司苑しえんの宮女に頼んだら、

刈った時に分けてもらえないかな)

瓔珞ようらくとは、寶石と金を編んだ飾りのこと。海棠かいとうは桜のように、贅沢に咲きほこる

春の花。海棠かいとうに似た秋に咲く花なので、秋海棠しゅうかいとうという。

未央宮びようきゆうの庭は蘭淑妃のものなので、淑妃や公主である桃莉は花を自由に摘んでもよいが、手入れや管理は司苑の仕事だ。

(葉と茎をむしって水洗いした後、すり潰して患部に塗れば、大助かりになる人が男性も女性もたくさんいるはずんだけど)

だめだ、きれいな花が銅銭に見えてしまう。

美しい名前とはかけ離れた薬効を持つ花から、翠鈴は目が離せない。

「なにみてるの？ こっちだよ、ツイリン」

桃莉が翠鈴の手を引いて、庭を抜ける。風が吹くと黄色や白の塊が揺れて、菊の香りが届いた。草の青い匂いもする。

(いい天気だなあ)

翠鈴はほんやりと空を眺めた。

その時だった。急に背後から肩を掴まれたのは。

桃莉と手をつないでいたので、翠鈴だけでなく桃莉まで後ろに引っ張られる。

「庭の奥には行かない方がいい」

ぴしりと鋭い声が聞こえた。

翠鈴が振り返ると、そこにいたのは松光柳だった。隣には雲嵐が控えている。

「どうしてですか？」

問いかける翠鈴に、「見なさい」と光柳が庭を囲む塀を指さす。

見れば、ザツザツと音を立てながら、伸びた草を鎌で刈っている宦官がいる。

庭の花の手入れは司苑の宮女の担当だが、塀の辺りに茫茫と生えた雑草を刈って運ぶのは重労働だ。ゆえに宦官に頼んだのだろう。

かなりの広さがあるが、彼一人で大丈夫なのだろうか。

「銀木犀の花を集めるだけですから、草刈りの邪魔はしませんよ。場所も離れていまずし」

「いや、これから樟脳しょうのうを置いていくのでな。あれは危険だ」

「蛇よけですか？ 開けた場所なので吸い込むことはないでしょうが、樟脳しょうのうを置いた場所が目印を立てておいた方が安全ですね」

光柳の説明に、翠鈴はすぐに答えた。

樟脳しょうのうは強烈な刺激臭があるので、間違つて口にはしないだろうが、素手で

触れば肌がかぶれてしまう。

「詳しいな」

「いえ、常識ですから」

とつさにそう答えたが、つい声が上がってしまった。

光柳は、常識なのか？ というように眉をひそめている。

（いけない。姉さんを殺した奴を討つまでは、目立たないようにしないと）

翠鈴は平静を装って光柳から視線を逸らす。

どうにもこの人は苦手だ。他の宮女たちが、さらっと流してしまう部分を気にしている。繊細なのか、神経質なのか分からないが、

「花を集めるのは別の日にした方がいいだろう。桃莉さまの安全のためにも」

「へび、いなくなる？」

「はい。ですから、今日は我慢なさってください」

翠鈴の手を握ったままおずおずと問う桃莉に、光柳が優しい声で諭す。

ふと、ヒーヒーヨと鳴く鳥の声が聞こえて、翠鈴は庭の塀を見やった。

丈の高い茎を持つ草に、小さな赤い実がぎゅっと詰まつてついている。その実をヒヨドリがついばんでいるのだ。

（蝮草だ。あれは下品なんだよね。毒があるけれど、薬にもなる。扱いは気をつけないと）

翠鈴は頭の中に入っている、薬種を集めた本草書に記載されている「天南星」という生薬を思い出した。薬としての蝮草の名だ。

光柳は翠鈴には行くなど命じたのに、自分は草を踏みわけて奥へ進んでいく。

「蛇よけの仕事は、君一人か？」

「いえ。もう一人いるはずなのですが、遅刻しているようです」

光柳に問われて、鎌を持った宦官は立ち上がった。まだ十代半ばだろう、少年に見える。

（なんだ。一人じゃなかったのか）

後宮の人員の配置は偏っている場合がある。暇そうにしている者もいれば、少人数で回していかなければならない部署もあり、今回は後者かと翠鈴は踏んでいた。

（光柳は書令史だったよね。なんで内侍みたいに目を配っているんだろう？）

宦官のことは正直よく知らないが、光柳の今の行動を見るとますます分からなくなる。

「さあ、桃莉公主、戻りましょう。銀木犀はこの庭でなくとも咲いていますから」

翠鈴は、桃莉の背中を押した。

「うん」と答えながらも、桃莉は歩を進めない。

「どうかなさいましたか？」

「おかあさまに、いいにおいのおはな、たくさんあげたいの。おかあさま、こまってるから」

「お困りとは、何かありましたか？」

翠鈴は、桃莉の前に回りこんでしゃがんだ。目の高さを合わせるためだ。その方が心に抱えこんだことを話してくれる可能性が高い。

「あのね、おてがみみてたよ。そのおてがみね、おかあさまは、くしゃってしたの」  
淑妃ともあろう高貴な身分の女性が、書状なり手紙なりを握り潰したりするだろうか。

（侍女頭の梅娜さんなら、何か聞いてらっしやるかもしれない）

だけど、宮女である自分が首を突っこんでも、蘭淑妃にとって迷惑だろう。

桃莉を安心させたいと思いつつも、翠鈴は分をわきまえて控えるつもりだった。

蘭淑妃が受け取ったのが、脅迫状であると知るまでは。



翌日の夕刻。未央宮の軒に吊るされた灯籠に、翠鈴は一つずつ明かりをともしていた。

秋の終わりの夜は早い。西の空はまだほのかに夕暮れの名残があるのに、未央宮はすでに影に沈んでいる。藍色の空にたなびく雲は、沈んでしまった太陽を恋しがるかのように、薔薇色に染まっていた。

翠鈴は火種のついた棒を上へ伸ばした。灯籠の油に差した灯芯に、火種を近づけて点火する。ぼわっと灯がともると、回廊がほんのりと暖かな色に照らされた。宵の群青に、並んだ灯籠の橙色の光。幽玄の世界へ誘われるかのようだ。

背の高い翠鈴には向いた仕事だが、背の低い由由は夜の点灯も朝の消灯も苦勞している。

「由由は室内の方がいいんじゃない？ 外はわたしがやっておくから」

「いつもありがとう。助かるわ」

未央宮では、室内の灯は天井から吊るされていないので仕事が楽だ。

皇后の住まいである寿華宮ともなると、高い天井から大きな宮灯が吊るされているそうだから、その司燈の仕事はかなりの重労働だろう。

とはいえ、回廊は吊り灯籠がたくさん並んでいて作業量が多いし、常に上を向いていないといけないから、これはこれで大変なのだが。

(まあ、わたしの方が年上だし、背も高いしね。由由が首を痛めたら大変なもの) ひととおりやり終えた翠鈴は、ふっと息をついて庭を見遣った。

菊や秋海棠の花の向こうは、草が刈り取られている。だが、刈り忘れだろうか、大きな葉の間から茎がすっと伸びていた。その先端についていた赤い実は、すべてなくなっている。鳥が食べ尽くしてしまったのかもしれない。

「じゃあ、中をやってくるね」

由由がそう言った時だった。蘭淑妃の部屋から悲鳴が聞こえたのは。

「早くお医者さまを呼んでちょうだい！」

「すぐに遣いを出します」

扉が勢いよく開いたと思うと、侍女が飛び出してきた。

「誰かが怪我をしたのかもしれないわ」

由由の心配そうな声を聞きながら、翠鈴は駆けていく侍女の背中を見送った。ここ

は辺鄙な田舎ではない。すぐに医官が来てくれるだろう。

翠鈴が仕事に戻ろうとした時、部屋から走り出てきた人が翠鈴の袖を掴んだ。カタン、と明かりをともし棒が床に落ちる。慌てて翠鈴は足で火種を消した。

「お願いっ、助けて！ 桃莉を助けて！」

足元までを隠す長裙ちんくわんに「まぎなきながら、女性が翠鈴にすがりついた。蘭淑妃、その人だった。」

「お願い……あなた、翠鈴でしよう？」

「え、あつ、はい」

どうして顔と名前を知っているのだろう。なんと反応していいのか分からずに、翠鈴は間の抜けた返事をしてしまった。

気づけば、しがみつく蘭淑妃の指は震えている。顔色も悪いし、淑妃の艶つややかな黒髪を飾る步瑤かみの簪かんざしが今にも外れそうなほど髪が乱れている。

由由はといえは、蘭淑妃が慌てて走ったことにも、同僚の翠鈴が高貴な主あまじに名前を憶えられていることにも驚いているようだ。頭を下げるのも忘れて、翠鈴を見上げている。

（こんなにも蘭淑妃さまが狼狽ろうたえていらっしやるなんて……桃莉さまにいったい何

が？)

そう考えて、翠鈴は息を呑んだ。

まさか、考えたくはないが――

「公主さまが毒蛇に噛まれましたか？」

翠鈴の問いかけに、蘭淑妃の瞳孔が小さくなった。

もし蛇に噛まれたなら、すぐに傷口よりも心臓に近い部分を布で縛らないといけない。なによりも毒が全身に回るのを防ぐのが先決だ。

すべき処置を、翠鈴は瞬時に頭の中に思い浮かべる。

「分らないわ。桃莉は蛇が出るって、ずっと怖がっていて……それで、蛇が潜ひそめなように草を刈って、蛇が嫌うものを置いてもらったのに」

扉の側の樟脳しょうのうは、蘭淑妃が依頼したものだったのか。

翠鈴としては、厄介ごととはごめんだ。自分は、姉を死に追いやった男に仇討かたきちをしないといけないのだから、目立つことはしたくない。

（けれど、桃莉さまが危険な目に遭っているのに、放っておけるはずがない）  
翠鈴は、まだ明かりのともっていない部屋を見据えた。

回廊にまで、部屋の中の籠かごえたにおいが届く。

（桃莉さまが、嘔吐なさったのか）

毒蛇に噛まれたれば嘔吐することがある。次第に意識が朦朧とし、尿に血が混じって腎臓がやられてしまう。最悪の場合は死に至ることも。

一刻の猶予もない。急がねば。

「医者が来るまでの間だけ、公主さまの様子を見せてください」

「ありがとうございます。翠鈴」

蘭淑妃は涙目で礼を述べる。

これまで会話をしたこともない蘭淑妃が、なぜ司燈である宮女の名前を知っているのか疑問は残るが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

（きつと桃莉さまや他の侍女が、わたしのことをお話しになったんだわ）

人見知りの公主が、たった一人懐いた宮女——それが自分であるのなら。

必ずや桃莉を助けると心に誓い、翠鈴は蘭淑妃の部屋に入った。

「由由、部屋の明かりを点けて。それから、手元を照らす物を用意して」

「は、はい」

ときばきと指示を出す翠鈴に、由由がかすれた声で返事をする。

蘭淑妃に仕える侍女たちは、ただ寄りそって怯えているばかりだ。

（侍女は、お嬢さまばかりだからしょうがないか）

翠鈴は天蓋のついた架子牀かしじょうに近づく。寝台にかけられた薄い帳とほりを開くと、夜具の

上に桃莉が横たわっていた。

よほど苦しいのだろう、背中を丸くして膝を曲げている。

少しでも楽な姿勢になろうと、小さな体を右に左に動かしている。そのたびに敷布しきふがこすれる音がした。

「いたい、いたいよお」

「桃莉さま。翠鈴です、お分かりになりますか？」

涙をぼろぼろと流しながら、桃莉は小さくうなずいた。明かりに照らされた桃莉の異様な顔に、翠鈴は息を呑んだ。

唇がひどく腫れてしまっているのだ。上唇も下唇も。

「失礼いたします」

「いやあ！ いたい、いたいの」

翠玲は、暴れる桃莉の衣の袖と裾をめぐりあげる。腕と足を確認するためだ。

蛇に噛まれたのなら、牙の穴が二か所あるはずだ。だが、ない。腹部を見ても、首や髪の間を確認しても見当たらない。

(蛇ではないようだが)

唇が腫れたということ、何かを食べてかぶれたか。

(かぶれる植物ならば、漆に<sup>はじ</sup>塗の木。今の時季ならば、銀杏樹の実ね)

けれど、と翠鈴はあごに指を当てて考える。

公主である桃莉が、漆や櫨の葉、ましてや小枝を口にするとはいえない。銀杏はあまりにも臭いので、黄色い実を手取ることもないだろう。

「公主さまは、今日はおやつを召しあげましたか？」

「山査子の餡がけです。桃莉さまが、たいそうお好きでいらつしやるので」

翠鈴の問いに、侍女は狼狽<sup>うろた</sup>えながら答える。

「山査子の餡がけは氷糖<sup>ヒシツクアール</sup>葫蘆<sup>フル</sup>とも呼ばれる菓子だ。

山査子は消化不良を改善し、胃腸を強くする。女性特有の血の滞<sup>とじお</sup>りにも薬効がある。ただし、実が熟したものだだけだ。

「今日の山査子は、大きさが不揃いだったんです。とても小さいものもあって……それが何か関係あるのでしょうか」

「山査子の未熟な実は、微量ですが毒を含みます。果実は緑でしたか？」

翠鈴の言葉を聞いた侍女は、頭が飛ぶかと思うほど激しく首を横に振った。

「どれも赤でした」

「そうですね。では、山査子が原因ではないようですね」

翠鈴が考えこんでいると、回廊を走る足音が聞こえた。医者が来たかと、翠鈴は戸口を見遣る。

部屋に飛びこんできたのは、侍女だった。

「申し訳ございません、淑妃さま。お医者さまは医局におられないようで、お留守でした。すぐに医官の方がお越しくださるそうです」

「すぐって、いつなの？ 陛下の太医にはお願いできないの？」

蘭淑妃は立ち上がって声を荒らげた。

太医とは皇帝陛下専属の医者だ。だが、一介の侍女がその場ですぐに太医を動かすことは難しいだろう。

医局には、翠鈴と同じ村の女性が医官として働いている。医官が何人いるかは知らないが、少しでも医学に詳しい人間に早く来てほしい。

(でも、その前にすべきことがあるはずだわ)

翠鈴は、医官を待っている時間が惜しいとばかりに考えを巡らせる。

「蘭淑妃。公主が急病と伺いましたわ」

侍女に続いて部屋に入ってきたのは、美貌の宦官、松光柳だった。走ってきたのだらう、額にうっすらとかいた汗が灯で光って見える。

「光柳。わざわざ来てくれたのね」

「私で力になれることがあるか、分かりませんが」

蘭淑妃は光柳にすがりつきながら涙を流す。

（光柳は位は低いのに、そんなに頼りになるのだろうか。書令史しよれいしでありながら、医術の本も読んでいるとか？）

いや、今は光柳のことなどどうでもいい。

医官はまだ来ない。さらに医者も遅れるのであれば、自分が桃莉公主の応急処置をしなければならぬ。

「桃莉さま。何か変わったものを口になさいましたか？」

「いたい……よお」

「樟脳しょうのうには？ 白いつんとする塊には……触れていらつしゃいませんね？」

翠鈴はそう問いかけるものの、気が焦って舌を噛みそうになる。

「……ない。ツイリン、だめっていつてた、から。タオリイ、してない」

ほろほろと涙を流しながら、桃莉が手を伸ばす。

横たわった架子かじ床とこの布団は、涙と唾液で湿っていた。まだ小さい公主の苦しむ様子に、翠鈴の胸は張り裂けそうになる。

「お口が痛いんですね？」

「した、はり、みたい」

要領を得ない言葉だ。しかも腫れた唇から発しているので、はっきりと聞き取れない。

「桃莉、桃莉……」

翠鈴の横に並んでしゃがみこんだ蘭淑妃が、娘に声をかける。だが、桃莉は苦しげに首を横に振るばかり。先ほどよりも顔には脂汗が滲んでいる。

蛇がいると主張していた桃莉。唇の腫れと激しい痛み。菓子は不揃いの山査子さんざしもしかして――

あることが頭に浮かんだ翠鈴は立ち上がった。

「牛乳を用意してもらえませんか？」

「牛乳？ 薬ではなく？ あれをどうするのだ」

光柳の問いに、翠鈴はきっぱりと断言した。

「飲むのです」

光柳は困惑したように眉を寄せている。

そうなるのも無理はない。牛乳を飲む習慣など、新把国にはないからだ。

だが、蘭淑妃や桃莉公主の皿を下げることもある翠鈴は覚えていた。牛乳の油脂を集めた酪らくや、酪を発酵させた奶餅ちまを、桃莉が好んでいることを。つまり、後宮では牛乳は飲まずとも、加工品が料理には使われているのだ。

「牛乳で痛みが減るのなら、原因が分かります。小さなお体に無駄に負担をかけるような薬を効くまで試し続けるよりは、有効かと存じます」

「分かった。すぐに用意させよう」

光柳の返事を受けて、侍女たちが厨房へと走ろうとする。

「待ってください。後宮では、牛乳そのものは手に入らないと思います」

「では、どうすれば」

おろおろと立ちどまった侍女たちが、不安そうに翠鈴を見つめる。

「後宮ではなく、内廷の厨房にあるかと。内御膳房ないごぜんぼうです」

「内御膳房ならば、私が向かおう」

そう言つて、光柳はすぐに部屋を出た。

把京あきつじょうの宮城では、内廷のさらに奥に後宮がある。女性と宦官のみが暮らす後宮よ

りも、皇帝の生活の場である内廷ならば確実に手に入るはずだ。

光柳を待つ間も、桃莉は右に左にと体を動かしながら呻うめいている。

ほんの少しでも唇が枕に触れれば激痛が走るのだろう。声を上げれば、口が痛むの  
だろう。

翠鈴は「失礼いたします」と声をかけて、桃莉の手を取った。

小さな手がびくりとこわばる。冷えきった手だ。

翠鈴は両手で桃莉の右手を包み込んだ。刺激にならぬ程度に軽くさする。

きつと内廷には牛乳がある。大丈夫、すぐに桃莉の痛みは取れる。

光柳たちを信じるのが、今の翠鈴にできる全てだった。

翠鈴の読みは当たった。

しばらくして、光柳が壺を手に戻ってきたのだ。

「分けてもらったぞ。牛乳だ」

「ありがとうございます」

後宮暮らしの翠鈴は、内廷の殿舎がどのような配置になっているのかは知らない。だが、かなりの距離があったようだ。光柳の息は上がり、こめかみの辺りを汗が伝っ

ている。一つに結んだ髪も、今にもほどけそうに乱れていた。

「早かったですね。誰かに頼んでくださったのですか？」

「ああ、途中から雲嵐に走ってもらった。私の速度に合わせるよりも、体力馬鹿が一人で行った方が早いからな」

見た目の柔和さに反して、意外と言葉がきつい。

まあ、どうでもいいことだけど、と翠鈴は聞き流す。

壺を嗅いでみると、確かに牛乳だ。新鮮なのだろう、嫌な臭いもしない。

「失礼いたします」と、壺を少しかたむけて、翠鈴はてのひらに少量の牛乳を出した。そして、白い牛乳の中にある小さな脂肪の塊を口に含んだ。

問題はなさそうだ。侍女から碗をもらい、牛乳を注ぐ。

「桃莉さま。この牛乳で、痛みが楽になるはずです」

そう告げる翠鈴に、桃莉はうつろな目を向けた。泣きすぎたのだろう、目の周囲が赤く腫れてしまっている。

「こわい」

「何も問題はございませんよ。わたしが悪いものが入っていないか、確かめましたから」

「いたいの、ない？」

「ございません。これを飲んでくだされば、治りますよ」

断言する翠鈴の背後で、蘭淑妃と光柳が心配そうに顔を見合わせている。

信じきってもらえないのは分かる。けれど、大人が不安な様子を見せていては、子供の不信感が募るばかりだ。

誰の信頼を得られずとも、桃莉にだけは信じてもらわないと。

「牛乳が、桃莉さまの痛い原因を包みこんでなくしてくれるのです」

「分か、た」

侍女に背中を支えられて、かろうじて桃莉は上体を傾けて起こした。

熱を持って腫れた唇に、冷たい器うつわと牛乳は心地よいのだろう。こくこくと喉が動くのが見える。

「もつとお飲みください。桃莉さまなら頑張れますね？」

「お小さい桃莉さまに、そんなに飲ませて大丈夫なの？」

侍女頭の梅那が不安そうな声を上げる。

「大丈夫です。陸翠鈴の言うとおりになさってください」

突然、凜れんとした女性の声が聞こえた。